

StrikeWitches ~
Neuroy Scouts ~

Eagle3718

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうも皆さん、up主のEagle3718です。

今回初めて投稿させていただきます。

拙い作品かと思いますが、よろしくお願いします。

テストが終わり友人含む3人で遊びに行く予定を立てていた。

しかし、トラックに突っ込まれポックリと逝ってしまった。

神様によってスト魔女世界に転生させられた俺達。

その先には何が待っているのか。

Strike Witches ｝Neuroy Scouts ｝開幕する！

全機偵察行動を開始せよ！

目次

プロローグ	1
登場人物情報	10
Neuroy Scouts	19
7 扶桑海事変編	3
MISSION 01	蒼穹の誓い
18	
MISSION 02	潜入偵察開
始	36

プロローグ

はい。みなさんに質問です。私は今どこにいるのでしょうか？
正解は

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

どこだろうなここ。

よし、まずは状況確認だな。

周りは白一色、見渡す限り白、白、白である。が、うおっ！まぶしっ！とはならない。

次に俺の身体の状態は

.....

は？

待て素数を数えて落ち着こう、2, 3, 5, 7, 11, 17, 23.....

よし落ち着いた。

さて、今の俺の身体の状態なんだが、”青いモヤ”のようになっていた。何を言ってるのかわからないだろうが俺も何を言ってるのかわからなかった。というポルナレフ状態はさておき、まだ状況確認が終わってない。

最後に記憶に関してだが、やはりといったところか異常がある。

まず、名前が思い出せない。次に姿が思い出せない。最後に家族、友人に至るまで名前、顔が思い出せない。

フムン。驚きすぎるのはかえって人を冷静にするらしい。

「おっ、漸く揃ったな」

その声で思考を中断する。その声は「揃ったな」といった。つまり俺以外に誰かい

るということ。周りを見渡すと、やはり俺以外に二人いた。やはり俺と同じような見た目である。

「ほう、意外と冷静な奴らだ」

かえって冷静になっただけだろう。そう思う。

「まあ前置きはここまでにしよう。まず、ぬしらはわしらの暇つぶしのために死んでもらった。これからぬしらには、所謂“神様転生”というのをして貰う」

大方そんなところだろう、と予想はしていたので今更驚く必要はないだろう。約1名大はしゃぎしているが。一度なってみたいなどと言っていたし、俺自身からしないじゃない。

「ああ、転生先だがStrike Witches世界にネウロイ側として行ってもらおう」

さつきまで跳ねていた奴が固まった。まあそうだろう。

「それと、姿はこつちでぬしらの記憶を参考に決めさせてもらった」

そう言ったところで目の前に鏡が浮かび上がる。そこにはHELLSINGの大尉がいた。ネウロイになるのにこれは必要なのか？

隣を見ると友人が作ったオリジナルのけもフレキャラもう一人は不明、多分うちの子というやつだろうアイツに画力があつたかは知らんが。

「んじゃ、いつてらー」
で、GYOUZUIが現れた。

は？

二人も同じように思っているらしい。GYOUZUIは手に持つうちわみたいなのや
つ（名前知らん）を上に掲げるとうちわみたいなのすごく輝きだし眩しさに顔
を覆った所で意識が暗転した。

意識が消える前、俺は

（なんでここでGYOUZUIなんだよ……）

そう思った。

「行ったようだな。あとはそれぞれに機体の記憶を与えてと、これでよし。あとは
せいぜい楽しませてくれよ?」

そのつぶやきが誰かに聞こえることはない。

………声が聞こえる。

「全く、なぜ彼奴は理解できない！」

………誰だ？お前は……周りはなにも見えない。どこだ？ここは………。

「ああ起きた……ようだな。んっ？私か？私はー」

1937年XX月XX日

■ ■ ■ ■ ■ ヨリ特殊偵察戦闘小隊各機二通達。

扶桑皇国方面ニ対シ大規模進行ヲ行ウ。

特殊偵察戦闘小隊ハ扶桑皇国方面ニオイテ偵察行動ヲ要請。

返答サレタシ。

#0605 FRX|99 LAFE 作戦内容受領

#0721 Tu|160 BLACKJACK 作戦内容受領

#0206 TYPE|97 TENPU|NE 作戦内容受領

扶桑皇国方面ニオイテ偵察行動ヲ開始スル。

登場人物情報

―機密文書持ち出し不可―

閲覧しますか？

<<はい>>

<<いいえ>>

ネウロイコアナンバー0605

編隊機ナンバー B―1

戦闘時モデルFRX―99 レイフ（戦闘妖精雪風OVA版）

人型時モデル大尉（HELLSING）

戦闘時モデル

FRX―99 レイフ

スペック

全長：18.0 m

全幅：14.52 m

全高：6.28 m

最高速度マッハ2.2 (偽装速度1,150 km)

巡航速度マッハ1.16 (偽装速度750 km)

限界高度: 24,800 m (偽装高度20,000 m)

武装:

20 mmビーム砲×1

主翼上ハードポイント×2

主翼下ハードポイント×2

胴体下ハードポイント×6

その他、各種可視光・赤外線カメラ、赤外線ラインスキャン、空間受動レーダー、コンフォーマル・マルチバンドESMセンサー等の各種偵察装備を搭載。

主翼は折り畳み可能な軽い上反角のついた前進翼で、最高速度で飛行する際は裏返って後退翼となり、着陸時には垂直に立ててエアブレーキとして使用する。垂直尾翼は存在せず、機首には後退角のついたカナードを装備。エアインテークは胴体下部及び上部左右の計3基、上部の2基はラムエアモードのみ使用される。エンジンノズルはベクターノズル。

元の機体がハイスペック過ぎたため、神様の手によりスペックダウン。それでも高スペックなので偽装という形でスペックダウンした。

エンジン自体の設計等はそのままなのでリミッターを外せばスペックを戻すことも可能。

20mmビーム砲は連射速度、威力ともにOVA版に準ずる。

ハードポイントはまだ使えずアップデートを行えばミサイル等を装備することも可能である。

非戦闘時モデル 大尉

身長は190cmと大柄。原作の大尉は喋らないがココの大尉は喋る。

性格は寡黙であり、必要とあらば味方を切り捨てる事が出来る程度に冷酷である。

転生する時、小説版戦闘妖精雪風のB-13レイフの記憶を植え付けられた。

ネウロイコアナンバー 0206

編隊機ナンバー B-2

戦闘時

Type | 97 Se Tenpu | Ne
 スペック

13・2mmビーム×4 (上下2門づつ) 47mmビーム×1

最高速度 984Km/h

適正高度 海拔

最高高度 10700m

旋回時間 18・3秒

上昇速度 39・6m/秒

本来なら対地戦闘機だったが、対空にも使えるという事で採用し、最高速度と共に加速性も求めた機体。

1秒当たり7km/hのペースで加速出来るが、その反面エネルギー保持は良くはなく、1周旋回すると2000〜3000km/hはスピードダウンする。なお、この作品ではある程度現実的な性能で、実際、スペックは戦後ジェットレベルである。

機首武装しかないネウロイとなったが、運動性は中々良い性能で、加速性と重心の位置のお陰もあり、特異な機動で機首武装を補っている。時代背景の都合で98式から97式に変わった。

最近では、13・2mmビームを全方向に撃てるようにする改修を施されたというは

なしがあるが、前方以外にはまだ1度も撃ったことはないらしい。

元機体名 ヒノダ技術 X3Hi2 98式対Se用特殊戦闘機 天風 21型

元機体説明

元々オリジナルのレシプロ戦闘機なため、スペックこそ曖昧だが、現代の技術で作れるような設計で、速度や上昇力を補うため、「Me262C」のように、ワルター機関が別に積まれたが、ネウロイ化した際は墳式のみとなった。Seとは、とある世界の特殊不明生命体の頭文字で、この機は、すべてのこれを駆除するという目的で作られた。いわゆる2次創作の名残である。

経験の浅い者でもある程度は戦えるよう、水銀式の自動トリム装置が付いていたり、視界確保のため操縦席は主翼より前に配置、炎上しても搭乗員がある程度無事なよう、燃料やエンジンは全て操縦席より後ろに配置された。

武装は硬い装甲を貫徹できるよう、貫徹力410mm/500mのヒノダ技術の47mm砲を使用、副武装にプロペラ同調式13.2mmを配置した。先尾翼にして下がった運動性を補った。

ヒト型時 カエン F2Kn X(オリジナル)

上記の世界の住人として作られたカナンというキャラクターだったが、その後、その先の先代という形でオリキャラ第1号の派生としても採用し、それを改造したのが本作品のキャラクターである。性格は、物事を哲学と理論で考えるタイプで、無理なことにはかなり消極的になる。自分で作った機体だけあって、機体を使いこなす。なお、モデルは女性だが、本作品では低身長（151cm）な男性である。元のカエンは184cmだ。

転生する際、特殊不明生命体との戦闘で撃墜されたヒノダ技術 X3Hi2 98式対Se用特殊戦闘機 天風 21型の記憶を植え付けられた。

ネウロイコアナンバー 0721

編隊機ナンバー B-3

戦闘時モデル Tu-160 ブラックジャック (Белый лебедь)

ビエールイ・リエービエチ)

スペースク

全長 54.1 m

翼幅 55.7 m (後退角20度) 50.7 m (35度) 35.6 m (65度)

全高 13.1 m

最大水平速度 950 km

上昇率 38 m/s

上昇限度 15,006 m

機体は胴体から主翼まで滑らかに厚さを変化させたブレンデッドウィングボディを採用しており、固定翼部の前縁は角度が大きい後退翼となっている。

アクティブECM防御装置、レーダー警報受信機、が装備されている。

可変翼である主翼の後退角は20度、35度、65度の三段階から手動で選択する。離着陸においては20度、高速飛行においては65度を使用する。

主翼は、前縁のほぼすべてにスラット、後縁最外側にドループ・エルロン、その内側に横に3分割されたダブルスロットドフラップ、上部に片側5枚のスポイラーを装備する。垂直尾翼と水平尾翼は全体が可動する全遊動式となっており、垂直尾翼の固定部前縁から胴体背部の主翼後縁部までの間にドーサル・フィンを持つ。

ネウロイ化しても、その弾薬蔵は健在であり最大10,000 kg搭載可能である。

武装は全身にあるビーム発射口の他、10,000kgまで搭載可能な弾薬蔵がある。

人型時

見た目は銀髪、碧目で色白。身長は175cm体格は細身である。

性格は常にニヤついており皮肉屋で愉快犯である。戦場においては味方の緊張を適度に抜くことができる、がやりすぎて怒らせてしまい後からボコられる。

転生の際とある世界線のTu-160 ブラックジャックの記憶を植え付けられる。

閲覧を終了しますか？

〈はい〉

〈いいえ〉

Neuroy Scouts 1937 扶桑海事変

編

MISSION—01 蒼穹の誓い

1936年

第一次大戦終結より20年近くを経て。

かの壮絶な戦いが世界に残した傷痕はすでに癒えつつあり。

遠い異国の小規模な戦闘の報も、その束の間の安寧を揺るがす程ではなかった。

しかし、かすかにたち昇り始めた暗雲は、確実に世界に影を落としつつ……。

人類はやがてくる脅威に対抗するための、新たな“力”の開発を急務としていた。

かつて鋼鉄を貪る異形の怪異ネウロイと戦った者達。

人々は敬意を込めて彼女達をこう呼んだ。

”魔女”と。

そして今、またひとり。

1937年7月7日

舞鶴近郊講導館道場

「はあっ！」

バシツと竹刀の当たる音が響く。

「一本！」

そう、勝負の終了を告げる。残心をし多少呼吸を整え相手に礼を言う。勝利したのは右目に眼帯をした少女、

舞鶴海軍付属小学校6年生

さかもとみお
坂本美緒 12歳である。

「やれやれ…もう動ける奴は居ないのか…」

右手をあごにあて少し不満げにつぶやいたのは、

講導館剣道 師範代 兼

舞鶴海軍航空隊所属

扶桑海軍少佐

きたごうふみか
北郷章香 19歳である。

「はあく魔女候補生がこれじゃあなくいくら平和だと言っても全く先が思いやられる

…」

彼女の視線の先にあるのはすでに息を整えこちらを見ている坂本と、その先で降り重

なっている魔女候補生である。

「ここに坂本以外で気合いのある奴はいないのか」

とそこに影が差し込み思い出す。

「つと、いやひとり居たな」

バシィツと音を立てて竹刀が交錯する。

「フツ、今日こそ決着を付けるぞ！美緒っ！」

ミミを生やしながらそう啖呵を切ったのは

舞鶴海軍付属小学校 6年生

若本わかもと徹子 12歳である。

「望むところ……！」

坂本もミミを生やしながら応える。

「二人とも元氣だなあ。若い子はこうでなくちゃ」

そうはっはっはと笑う。

勝負は佳境に入り坂本は突きの構えを取り、若本は横凧の構えを取り――

「はあああっ!!」

勝負を決めにかかる。

坂本の振るった竹刀は若本の左、頭一つぶんのところへ。

若本の振るった竹刀は坂本の左側頭部すぐ近くにあつた。

暫しの静寂。セミの鳴き声だけが聴こえる。

その静寂は北郷の

「ふむ、若の勝ち……かな？」

というセリフによつて破られるが、まだピリピリとした雰囲気が残る。が、
 「ごめんなさいっ！遅れちゃいました！」

そのピリピリとした雰囲気をもつ端微塵に砕いたのは、

舞鶴海軍付属小学校 5年生

竹井醇子 たけいじゅんこ 11歳であつた。

「……………」

場を静寂がまた支配する。先ほどまでのピリピリしたものでなく気の抜けたものであるが。

「……………へっ?」

その静寂の意味がわからず混乱する竹井。

「……………チツ……………引き分けだ！自分の魔眼も制御できない奴相手に勝つた気分にはなれないからな…」

興が削がれたのだろう。若本がそう言い放つ。

「!!」

それに反応する坂本。

「…やれやれ、お昼にするか…」

側頭部に手を当て大きくため息をつく北郷。

随分と苦勞しているらしい。

所変わって飛行場

「うわあー!!ひろーい!!私こんなに広いところ初めてです!午後は飛行訓練なんですか?」

腕を大きく広げよろこぶ竹井。

「うん、ちょうどよかったからね。こういう気持ちのいい日は外で食べたほうがご飯も美味しいよ」

そう言いながら手に持った弁当箱を見せた。

「……でこうしているとなんだか空の上に居るみたいですよ」

そう頬にご飯粒を付けた竹井がのびをしながらごちる。：後ろでみかん入りおにぎりを食べて顔を青くしている若本がいるが気にしない。

「空と海の境目がなくなつて、風といっしょに自分もどこかへ飛んで行けそうで」
そういう竹井の目の先にはどこまでも蒼い海と空が広がっている。

「ははっ。本物の空はもつといいぞ。どうだ坂本、君もそろそろ正式な魔女として訓練を受けてみる気はー」

そう北郷が空を見上げながら坂本に聞く。が、

「……めんなさい……私には……そんな力……」

眼帯を押さええながら弱々しく答える。

「……はあ。その眼……か」

北郷はその手の上に自身の手を添え魔法力を流す。

「なあ坂本、私は魔女として軍人なんてやっているが根は平凡な人間だし、はたから見

れば二十歳も過ぎない小娘さ。私には怪異ネウロイから世界を守るなんて出来ないし、扶桑軍人として恥ずべきことかもしれないが、本音を言えば扶桑も無理だ」

二人に使い魔のミミと尻尾がはえる。

「私に守れるものは精々この舞鶴の町と、大切なものを守りたい。この気持ちくらいなものさ」

すくり、と北郷が立ち上がり軽く腕を広げ続ける。

「でも、君のその眼は違う。きつと舞鶴ヒメに居る誰よりも多くの存在を守れる、私は…そう信じているんだ。

ほら…空はこんなに広いんだ。君が飛ぶ場所なんていくらでもあるさ」

と、けたたましくサイレンが鳴り響く。

「なんだっ!？」

「敵襲——!! 方位三四〇! 飛行型! 数つ 三!」

切迫した声色で兵が告げる。

「先だつて艦隊と接触した怪異ネウロイか…!? こんな所まで…」

北郷が呟く。

「回せ——っ!」

君達は早く安全な場所に避難していなさいっ!! いくぞ! 若本っ!」

そう坂本達に告げ候補生を引き連れ空へと上がる。

しばらくしてから青空の中に白い線を3本見つける。

「あいつか……?」

(こっちは飛べるといつても候補生達……。私を含めて皆実戦は初めてだ……。どこまで出来る!?)

安全な場所へと避難した竹井と坂本。

「……」

「美緒ちゃん……みんな、大丈夫かな……」

坂本の袖を掴み不安そうに竹井が尋ねる。

「今は……うん、でも……!」

「えっ……どうしたの?ここからじゃ何も見えないよ……」
僅かに風が吹く。

「わっ!わっ!きやあつ!」

ネウロイにより一人落ちる。ネウロイはまだ一機も落ちていない。

「くっ!」

(私に飛ぶ力があれば……でも……魔法力が……)

「……っ!」

「美緒ちゃん……」

迷う。が、

『君はきつと舞鶴こじに居る誰よりも多くの存在を守れる』

北郷の言葉を思い出す。

『私はそう信じているんだ』

「先生……。私は自分で自分の力が信じられません……。空を飛びたくて、
魔女ウィツチになりたくて……ここにいるはずなのに、私のこの右目は一度だつて……」

「美緒ちゃん!？」

「そうだ!」

急に走り出した坂本に困惑しつつも追いかけるように竹井も走り出す。

そしてたどり着いた場所はストライカーユニットを格納している場所。

「よかった。まだ残ってた…!」

「お おい…! 君たち! こんな所で何をしている! 早く避難を!」

そう、たまたま見つけた整備兵が叫び、竹井の手を借りて取り付けられるストライカーユニットを見て顔色を変える。

「あつ! 駄目だ! その機体はつ…!」坂本美緒!! 発進!! 二

何かを伝えようとした整備兵だったが魔導エンジンの音と坂本が発した大声にかき消され届くことはなかった。

〈…舞鶴方面！高度6000！数は3機！ネウロイの別働隊です！〉
インカムから声が響く。

「この声…！坂本か！」

「あいつ…！」

北郷は坂本が飛んで来たことに驚き、若本は漸く来たかとも言うように鼻を鳴らす。

「私が先行して奴らをひきつけて…」

〈無理だ！もういい！あとは任せろ！〉

坂本の息は上がり酷く汗をかいている。

「…あれ？急に力が…はいら…なっ…！」

ポフツ、と音を立ててストライカーが煙を吹く。北郷からは、煙が二つに分かれさらに片方が二つに分かれるのを確認する。

「なっ！」

煙を確認してすぐダイブ、加速し海面スレスレを飛び坂本の救助に向かう。

「言わんこつちやない…！」

「まったく…あんな機体で初めて飛ぶなんて…何て無茶苦茶な奴だ…後は私に任せて君は休んでいなさい」

「せ……んせい……」

坂本がそう絞り出す。体は震え顔色も悪い。

「なに心配するな、言っただろう？舞鶴くらいは守れるってな」
坂本を下ろした後そう言い残して北郷は空へと上がっていった。

「さて…」

目の前にはネウロイが残した3本の白い雲、その先端にはネウロイが見える。

「坂本^{あいつ}に失望されたくないからな」

腰に携えた二本の扶桑刀を抜く。

〔講導館剣術免許皆伝北郷章香、推して参る!!〕

北郷が戦っている空域のはるか上空。高度20,000mに”ソレ”はいた。

”ソレ”は黒くハニカム状の模様がある事からネウロイであるとわかる。が、高度2

0, 000mという高高度まで登れる機体は人類側には無い。

さらに速度は、750kmと高速でありネウロイにもこの速度を出せる機体は”ソレ”を含め3機しか存在しない。

”ソレ”の見た目は一般的な飛行機よりも大きく、翼は前に伸びていた。垂直尾翼に当たる部分はなく、機首は鋭く前に伸びている。その機首も途中で二股に分かれ、胴体へと繋がっていた。

機首と胴体が繋がっているあたりには、大きく後ろへ後退した小さな翼が左右に生えていた。そしてその間には、円筒状のパーツがあり前方は赤く彩られていた。

その下には楕円形のパーツがあり下面には三つのレンズが顔を覗かせている。

(…フムン)

”ソレ”は下で行われている戦闘を下面にあるカメラで記録として撮影していた。

(全機墜落…か…)

”ソレ”は戦闘に参加することなくただ視ていた。

(こちら特殊戦一番機レイフ。情報収集行動終了。Complere MISSION
N RTB)

”ソレ”、レイフは大陸の方向へ機首を向けて加速、その存在を人類に悟られる事無く空に溶けていった。

蝉の音が聞こえる。窓からはそよ風が入り静かにカーテンを揺らしている。

「……………ん……………こは……………」

意識が覚醒する。自身の体制から寝かされている事を自覚する。

「おっ、気が付いたかい？ まったく…調整中の戦闘脚ユニットで無茶すぎだよ」

「……………先生こそ…」

「なに、大した怪我じゃないよ」

ギプスで固められた左腕を振って見せる。

「…怪異は…みんなは…どうなったんですか…:…」

「ネウロイ奴等ネウロイはみんな落としたよ。いやしかしなあ、舞鶴くらいは守れると言っておきながら君の眼がなければ本当に危ないところだったよ」

じわり、と目頭が熱くなるのを感じる。

「…そう ですか」

「あゝそれであー先だつての戦いで候補生がだいぶやられてしまつてなゝ…」

北郷がわざとらしく言う。そして坂本は

「ー先生、私はーウィッチ魔女になりますー」

そう力強く答えた。

MISSION—02　　↳ 潜入偵察開始　　↳

1930年2月18日23時59分

扶桑海上空

S i d e
????

高度2000mを二つの影が800km/hで駆けている。

〈チェックポイントブラボー到達1分前〉

〈了解。全くなんで俺が…〉

〈私は中尉、あなたは少尉ドゥーユーアランダスタン?〉

それは普通の航空機では無く黒く、全身に薄くハニカム模様が浮かび上がっていた

〈ちくしよおおおおお!! (若本ボイス)〉

〈唐突な若本ボイスに草不可避つと。チェックポイントブラボー到達、B—3の護衛任務を終了する。グットラックB—3　へますんなよ〉

〈一言余計だボケ。センキューB—2　グットラック〉

それを合図に二機のネウロイは別れる。一機は反転し元きたところを通り離れる。もう一機はまっすぐ扶桑皇国を目指し空を駆けていった。

S i d e o u t

S i d e
B | 3

やあ諸君、私だ。まあ自己紹介？はここまでにしといて、何故私が真夜中の扶桑海を一人寂しく黙々と扶桑に向かつて跳んでいるかというところ……あれ？おかしいな、目から魔法力が……ぐずん。

やめよ、悲しくなってきた。まあ、何故扶桑に向かつているかという任務です。あ、言つとくけど爆撃じゃあないよ、偵察任務です。それも長期のね。次のチェックポイントまで時間があるし確認もかねて説明しよう。

偵察任務の内容は”人類の戦闘機械の調査 人類の意識調査”である。人類の戦闘機械の調査とは妨害ナシのスパイ活動である。人類の意識調査とは人類が何を考え、何を思っているのかを調べること、簡単に言えば心理学である。

戦闘機械の調査はわかるけど意識調査はなんで必要なの？と思うだろうから説明をば。我々ネウロイと人類とでのコミュニケーション不全を解消するためというのがある。この戦争はそれを発端としていっているといい。前大戦においてわかったことというのが人類は我々金属生命体と違い有機的生命体であり我々と同じように個々で独立した思考を持つ知性体である。と言うことだ。思考を持つのであれば交渉も可能であるのだが、人類と我々で思考回路に違いがあるかも知れない。と言うことになり、じゃけんプロに任せましょうね、となり我々特殊戦におはちが回つて来た。

そういうことなのだ。

おっと。

(チェックポイントチャーリーに到達、速力800km/hから350km/hまで減速……ok。同時にアクティブエンジンサプレッサー起動……ok。現在時刻0130、遅延なし)

平和だあ、こういう時こそ月見酒でもしたいなー、と言っても今日は新月なので月は見えません。ちくせう。

……まあ、画面の向こうの人には関係ないか。

次は任務遂行までのプロセスだな。

- ・拠点出発後人類側に発見され無いうに警戒しつつオホーツク海へ向かう。
- ・オホーツク海上空に設定されたチェックポイントアルファに到達後旋回し間宮海峡へ向かう。

- ・間宮海峡通過点をチェックポイントブラボーとし、チェックポイントブラボー通過をもつてB—2は離脱、帰還する。

- ・B—3はそのまま扶桑海上空に設定されたチェックポイントチャーリーに到達

後、機速を350 kmに落としアクティブエンジンサプレッサーを作動させ、扶桑皇国本土へ向かう。

・人目を避けつつ扶桑皇国内陸部へ侵入し、設定された湖であるチェックポイントデルタに向かい付近の生体反応に人がいないことを確認後、着水、上陸。

・上陸後、住民票を偽造し”偵察行動”を開始せよ。以後の行動はB―3に一任する。

・偵察情報は機会を待ち、特殊戦隊員のうちのいずれかを接触させ情報の受け取り、必要に応じては任務の追加、継続、終了を指示する。

…てのがおおまかな内容だな。

因みにチェックポイントデルタ到達予定時刻は0300、真夜中です。ファツキュー。

(つと、ようやく見えてきたな。”扶桑皇国”がよお。

こつからは集中していかないとなあゝ任務失敗して、スーパー婆さんにどやされるのは勘弁したいからな)

キングクリムゾン！

住民票を偽造して住民に紛れるという過程は省略され、偵察行動を開始して7年経過するという結果だけが残る！

作者のネタが尽きかけた為7年ほどキンクリされたようだ。

はいどうも、特殊戦三番機B―3こと轟トシロキ 吾妻技術中尉です。

今現在ウラル方面に向かっております。

なんでかって？

私が新型戦闘脚の開発に携わっていたので、新型戦闘脚の実戦での使い心地とか、故障した戦闘脚の故障原因を調べて次世代戦闘脚に活かしたりしてほしいと軍令部から言われてな。

ネウロイのスパイを重要な所に配備する軍令部マジ無能。

ん？魔眼系の固有魔法でバレルんじゃないかって？

残念ながら既に対策済みでね。その対策が

”ヒューマンセンズジャマー”（ダミ声）

こいつのおかげで魔眼や魔導針、接触魔眼ですら俺をネウロイと認識するのは不可能なのさ！

ただし、これを使用できるのは一般的なネウロイでは不可能で極一部の特殊なネウロイしか使用ができず、一般的なネウロイでは使った瞬間処理が追いつかず爆発四散サヨナラ！となってしまう。ネウロイの使う超圧縮レーザー通信も使えず、さらに身体能力も人並みになるといって、完全に偵察専門の技術である。

開発者は、うちの戦隊長サマと副司令である。

まっ、以上の理由からバレることはない。……フリじゃないぞ。

まあ、個人的にも機械いじりが好きになってきているので偵察とか抜きにしても楽しみだし、ウィッチーズを弄れそうならそれで、愉悦が止まらない！

よし！着いたらついで、愉悦麻婆をつてやらねばならぬな！

この後一度浦塩で休憩&補給があるしそこで材料を買わねば。

つと、買う前に彼方さんの人数を確認しないと……………

ええつと、陸さんは江藤敏子中佐、加藤武子少尉に穴拭智子少尉、加東圭子少尉、

黒江綾香少尉の四名で、海さんのほうは北郷章香少佐、若本徹子一飛曹、竹井醇子一飛曹、坂本美緒一飛曹の四名、俺含め計九名だね。

リアクションが楽しみではあるが、それよりも……………

「見せてみな。お前達ウィッチーズの力を、俺たち特殊戦にさあ」

全く楽しみで仕方ないねえ。